



# 小泉八雲「怪談」



～私に影響を与えた一冊～

池田龍二

## 怪談を読んだ小学生

---

小学校5年生の夏、長らく治らなかった扁桃腺炎がこじれ、腎臓炎を患ってしまった私は、1学期の終業式にも出られず、通信簿を友人達に届けてもらった。

友人達のなかには好意を持っていた女の子も居て、恥ずかしく照れくさい思いで、通信簿と夏休みの宿題の束を受け取った。

結局その年の夏休みは、かかりつけの医者通いを続け、運動してはいけない、塩分を取ってはいけないなど、なんとも味気ない夏を過ごすことになった。

自宅は、戦災を逃れた木造2階屋で、その2階の1室に布団を敷いてもらい、そこでじっとしているしかなかった。手持ち無沙汰のため、庭にあるいちじくの木を眺めたり、日増しに大きくなり、やがて枯れていくひまわりを写生したりして時間をやり過ごしていた。

障子一枚隔てた隣の部屋は父の書斎兼仕事場で、大きな本棚があった。父は本好きで、沢山の本を買い込んでいたようで、芥川龍之介や夏目漱石、宮澤賢治などの全集がならべてあった。私は、暇に任せて、手当たり次第それらの本を読みあさった。そんな中の一冊にラフカディオ・ハーン、つまり小泉八雲の「怪談」があった。発音としてはkaidanではなく、Kwaidanである。巻頭に「耳なし芳一」があるのは、広く知られていることと思う。

## 「芳一！」 「芳一！」 と呼ぶ声

---

平家と源氏の戦いの末、幼帝である安徳天皇が入水して以来、壇の裏には平家の怨霊が跳梁跋扈し、様々な怪異なことがおきた。芳一は、琵琶を弾き、語ることに優れ、壇の浦の合戦を語れば「鬼神も涙をとどめえず」と言われるほどでありそれがために災難にあうという話である。

小学5年生である私は、この本を、多分昼間、家の人間がそれぞれ用事があったり外出してしまった時に、読んでいたのだろうと思う。

「芳一！」 「芳一」と大声で呼ぶ平家の落ち武者の亡霊の姿、全身に書かれたはずの般若心経が唯一、耳には書きもらし、その耳が闇夜に浮かび上がって、平家の亡霊がその耳を引きちぎっていくさま、恐怖に耐える芳一の心細さなどが、一挙に頭に流れ込んできて、その怖さといったら、なかった。

明治生まれの父が買った本だから、当然旧かな遣いで、本当に読めたのかどうか今となっては心もとないところもある。だが読んだあと、心底怖くなったことだけは40年以上の月日がたった今でもおもいだす。

尾籠な話で申し訳ないが、当時は東京オリンピックの前であるため、東京都内でも、お手洗いは汲み取り式であり、一般的には、家の北西の方角の湿った暗いところにあるのが普通であった。我が家もご多分にもれず、お手洗いは暗い廊下の端の突き当たるところにあった。

「耳なし芳一」を読んで、恐怖感を味わった日の晩、とてもではないがお手洗いにいくことが出来ず、かと言って親に泣き言も言えず、じっと布団をかぶっていつの間にか寝入った後は、どうなったか。言葉に出すのも恥ずかしいことではある。

## 今、新たに読み直してみても

---

今、岩波文庫の耳なし芳一を読み返して、そのころ理解できなかった時代背景や表現力など、当時とは比較にならないくらい深く心に沁みるものがあり名作の持つ力を感じる。そしてあの時間いた「芳一！」「芳一！」という亡霊の声は、やはり迫真の力を持って、今でも響いて来たる。紙に活版印刷、それも黄ばんだ紙に印刷された「怪談」は、その本自体が存在感を主張し、その筆力とともに、小学生を打ちのめしたに違いない。その日以降も、懲りずに宮澤賢治のセロ引きのゴーシュなど、いわゆる名作を手当たり次第読みふけり、退屈な夏をなんとかやり過ごし、2学期には無事登校できることになったのは不幸中の幸いというべきか。

感謝すべきは、沢山の本を、子供の手の届くところに置いていてくれた父と、お手洗いにも行けなくなるようなとんでもない怖さを味合わせてくれて、それでも以降読書の楽しみを与えてくれた小泉八雲である。

本は想像力をかき立てる優れた媒体であり、手元に転がっていれば、そして内容が優れていればいつでも時空を超えて、あるいは性別や年齢も超えて、書かれている世界に没頭できる優れたメディアであると思う。

Kindleが日本語対応され、電子ペーパーに表示された、縦書きの「耳なし芳一」を読む少年は、果たしてトイレに行けなくなるほどの恐ろしさを味わうことができるのか。

おそらく、名作というものは、紙と電子の差など容易に乗り越えて、読むものに伝わるものと思う。

紙の質感や紙魚、古本特有の匂いなど、リアルな本特有のノスタルジックな感覚はやがて、過去のものとなるのだと思うと寂しくもあるが、また所詮媒体は変化するものとの割り切りも必要で、旧かな遣いの名作を電子書籍で再読する日は近いと信じている。

小泉八雲「怪談」 一私に影響を与えた一冊一

<http://p.booklog.jp/book/48457>

著者 : unlimitryoji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/unlimitryoji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48457>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48457>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.